

# ぼくのおくり物

新見市立新見南小学校

四年 道繁慶恒

ぼくには姉、双子の妹、もう一人の妹がいます。兄弟姉妹は男の子がぼく一人だけ。いつもにぎやかで楽しい四人ですが男の子ひとりがちょっとびりきを感じる時もあります。

今年の母の日のでき事です。ぼく以外の姉、妹達は母の日のサプライズプレゼントのき画を相談していました。姉から

「恒、母の日のプレゼント、何がええ。」

と相談の仲間にさそつてくれてもすぐには考えがうかばず、気付けばぼくだけ、母の日のサプライズき画からはずれていたのです。あわてたぼくは、お父さんに、「姉ちゃんらあは、母の日のプレゼント、もう決めたんじやけど、ぼくはどうしよう。」

と相談すると、

「品物もええけど、手紙とかもえんじやあないか。」

と答えてくれました。ぼくも手紙なら一人でもできるしお母さんも喜んでくれると思いました。お父さんの言葉で、だんぜんやる気がでした。さっそく、手紙を書き始めた

のですが、少し書いてはやめ、また書いてはやめ、してはうちに母の日になりました。

母の日、姉や妹は順番にお母さんにプレゼントをわたしました。ぼくは、うれしそうなお母さんの顔をちらつと見てうつむいていました。ぼくは、心の中でささやきました。「お母さん、ごめんね。ぼくは、手紙をわたしたかつたんだ。」

今日は、とつても悲しい母の日になりました。

「おやすみ。」

と言つて、しん室に入つた後もお母さんのことが気になり、またリビングに出ていきました。お母さんは、ぼくを見て、「どうしたん、恒？」

とつこりしました。ぼくは、

「お母さん、いつもおいしいご飯を作つてくれてありがとう。ぼくのプレゼントがなくて、ごめんね。」

と下を向いたまま、小さな声で一生けん命伝えました。すると、お母さんはぼくをだっこして立ち上がり、ぎゅうっとしてくれました。ぼくは、心のきんちようが一気になくなつたように感じました。感しやの言葉だけだつたけど、お母さんは喜こんでくれたんだと思いました。

「恒、いつも笑顔をありがとう。お母さんはいつもみんなの笑顔でがんばってるよ。四人は、お母さんの大切な宝物。」

そう言つてぼくの頭をやさしくなでてくれました。お母さ

んの手のひらがとても温く感じました。すると、お父さんがじょう談ぼく、

「来年は、お父さんもサプライズき画に参加しようかな。」  
と言いました。ぼくもお母さんも笑いながら、とても幸せな気持ちになりました。

これで、『ぼくのおくり物』のお話、ハッピーエンド。